

25 浦島太郎の玉手箱

竜宮城から戻ってきた浦島太郎は、しばらく平和に暮らしていましたが、それにしても気になるのは帰るときに乙姫様から貰ったあの大きなかめの器です。

「これは、玉手箱というものです。絶対に開けてはいけませんよ。」

と、乙姫様は言いました。けれども、そういわれると開けてみたくなるのが人情というものです。ある日、とうとう浦島太郎は、こらえきれずに、そのかめを縛っていた縄をほどき、ふたを開けてしまいました。

中に入っていたのは透明な液体でした。そしてそれがまあ何という、いい匂いをさせたことでしょう。何ともいえない甘い、ふくよかな香りが辺り一面にひろがります。浦島太郎は思わずその液体をひとすくい、ひしゃくですくって飲んでしまいました。それがまた素晴らしい味でした。えも言われぬ甘酸っぱい、まるやかな味が口の中にひろがります。浦島太郎はまた一杯、もう一杯と飲んでしまいました。

翌朝のことです。浦島太郎はなんだかすがすがしい感じで、目を覚ましました。体中に不思議な力がみなぎっ

ています。いつものように浜辺に貝を拾いひろに行つた浦島太郎は、海に写つた自分の姿を見て、さらにびっくりしました。そこにはしわが一本もない、ずいぶん若かつた頃の自分が写っているではありませんか。

この時になつてはじめて浦島太郎は、なぜ乙姫様が何百才になつても、あんなに若くてきれいな女の人だったのかの理由が分かりました。

「乙姫様はあのかめに入つていた水を飲んでいたのに違いない。あれは若返りの秘密の水だったのだ。」
浦島太郎はそうつぶやきました。

ある日のことです。浦島太郎の隣に住むお婆さんおばあがひどい病気になりました。みるみるうちにやせ細つて、今にも死にそうです。

「お婆さん。これを飲んでご覧なさい。」

浦島太郎はかめの中の秘密の水を持って行つてお婆さんに飲ませました。そうしたらまあ何ということでしょう。

さきほどまで息も絶え絶えいきただだったお婆さんが、この秘密の水を飲んだ途端とたんにたちまち元氣を取り戻すではありませんか。真つ白だった髪の毛までがいつのまにか黒々となつてまるで若い娘さんのようです。

さあ、それからが大変です。このことがあつという間に広がつて、浦島太郎のまわりはこの秘密の水を貰もらったという人で引きも切らないほどになりました。

「浦島さん。私の病氣を治して下さい。」

「太郎さん。子どもが大怪我をしました。秘密の水をぬって貰えないでしょうか。」

最初のうちは親切に、誰にでもこの秘密の水を分けてあげていた浦島太郎も、こうひっきりなしに色んな人がやってくるのではたまりません。

第一、夜もろくに寝れず、貝拾いや、魚を釣りに海に出ることも出来ないのです。

ある夜のこと。やっと寝つくことが出来ると思った浦島太郎の家の戸を、また一人たたたくものがあります。

「夜分にすみません。浦島さんの秘密の水の噂を聞いて、遠くからやってきたものです。申し訳ありませんがこの

竹筒たけづつにその秘密の水を一杯だけ頂けないでしょうか。

私の母親あすが明日にも死にそうなのです。」

太郎は眠い目をこすりながら起き出して、ふらふらする足でかめのところに行き、秘密の水を一杯汲み出して

やって来た人に渡わたしました。

喜んで帰っていく人を見送った後、浦島太郎はかめの前に立ってつくづくと考えました。

「あんな風に頼まれたのでは断るわけにもいかない。さりとしてこのままではもう俺おれの身が持たない。それというもこんなかめを俺が持っているからだ。いつそのことこのかめが、なくなってしまうたらどんなにいいだろう。

よし、決めた。」

浦島太郎はそうつぶやくと、全身の力をふりしぼってかめを持ち上げ、床ゆかに向かって投げつけました。かめは大きな音とともに粉こな々に砕け散くだりました。

その途端とたんに、それまであれほど若々しかった浦島太郎も、あつという間におじいさんになってしまいました。

問 浦島太郎は、なぜ秘密の水の入ったかめを、割ってしまったのですか。